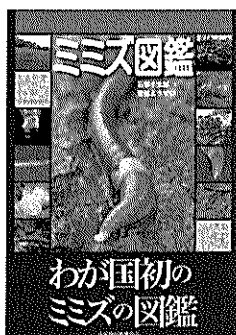


新刊書紹介

ミミズ図鑑

石塚小太郎／著

皆越ようせい／写真



ミミズを知らない人は、まずいないと言ってもいいだろう。では、われわれはミミズの何を知っているだろう。

釣りの餌になること、「土を耕してよくする」はたらきのあることが、比較的好く知られているようである。「ミミズと土」といえば、古くはダーウィンが研究したことで有名である。ダーウィンは30年ちかくにもわたってミミズの土づくりに関する壮大な実験を行い、ミミズが土を耕していることを証明した。

ミミズのはたらきはよく知られているとして、「ミミズの名前」についてはどうだろう。「ミミズの名前はミミズ」で、多くの人が済ませているのではないだろうか。言うまでもなくミミズは生物であるから、少なくとも研究者にとっては学名、和名をハッキリさせる必要があるのは当然のことである。

ミミズは貧毛綱に属する動物の総称で、日本に生息するミミズは主にフトミミズ科、ツリミミズ科、ジュズイミミズ科に属し、うち95%以上をフトミミズ科が占めているといわれる。その種数は500以上と推定されているが、名前がついているフトミミズはその2割程度にすぎないのが現状である。これでは「ミミズの名前はミミズ」と一般的に認識されているのもやむを得ないだろう。これは、ひとえにミミズの研究、とりわけ生物研究の基礎ともいふべき分類の研究が遅れていることによる。これまで、ミミズの専門的な図鑑

がほとんどなかったことも、研究がすすまなかった一因といえよう。

そのようななか、待望の日本産ミミズ図鑑が発行された。本書では、種を同定するために必要な作業について、初心者にもわかりやすく解説されている。外部形態と、解剖して確認する器官の形態が鮮明な拡大写真と図で示され、さらに主要な形質は器官別に決まった色の矢印で示すなど、さまざまな工夫がなされている。分布については全国分布種、広域分布種、地域分布種に分類され、さらに種数の多いフトミミズ属については、生息域を表層種、浅層種、深層種に分けて示してある。また、随所に採集地や生態写真が添えられているので、ミミズが生息している環境を的確にイメージすることができる。

著者の石塚氏は参考書の乏しいなかで、ひたすらミミズと向き合うことによりフトミミズ属に共通する特徴、種の決め手として使える形態を選別し、生息している深さ別に類似の形態を示す器官に着目するなど、多くの新しい手法を取り入れて分類体系を構築した。また、種の同定を難しくしている個体変異については、数十から数百個体を調査し、変異の幅を示している。また採集数の多い種については幼体、亜成体、成体の出現時期も示されている。

一方、図鑑を作るためには写真が欠かせないが、撮影の皆越氏は、種類別に、生きているミミズの全体写真と、同定に必要な部分の拡大写真をはじめ、ミミズの卵包形成と放卵、発光するミミズ、落ち葉を巣孔に運んだり、食べたり、糞を排出する瞬間など、何時間、あるいは何日も粘り強く待ち続けて撮影した貴重な写真を提供している。

ともあれ、わが国のミミズ研究は本書の出版前か後か、で大きく進歩の度合が変わることだけは間違いないであろう。

本体価格 4,800 円、発売：全国農村教育協会
(TEL03-3839-9160, FAX03-3833-1665,
メール hon@zennokyo.co.jp)。